住井すゑとその文学の里（二十一）

―牛久沼のほとりー

牛久市文化財保護審議委員　栗原（くりはら）　功（いさお）

片岡蔵相の発言で起こった金融恐慌

―世相を反映した小説「街の浮浪者（ルンペン）」―

昭和2年（1927年）3月14日、衆議院予算委員会で答弁に立った若槻内閣の片岡直温（なおはる）蔵相は「東京渡辺銀行がただいま休業しました」と顔をひきつらせながら一枚の紙切れを読み上げた。

この発言が金融恐慌（きょうこう）の直接の導火線となるとんだ失言だった。確かに経営は苦境に立っていたが、東京渡辺銀行が休業した事実はなかったのだ。が、答弁用の作文は片岡蔵相が書いたのではなかった。その直前に大蔵省を訪れた同銀行の幹部が「日銀へ支払う手形交換尻決済の資金がない」ともらしたのを、早飲み込みをした事務官が休業と判断して作文を書き片岡蔵相に手渡したのだった。

「東京の名の通った銀行が休業した」。翌日の各新聞でこの事実を知った全国の預金者は銀行の窓口へ殺到、またたく間に「取り付け（預金者が銀行に殺到して預金の引出しをすること）」の嵐が広がった。

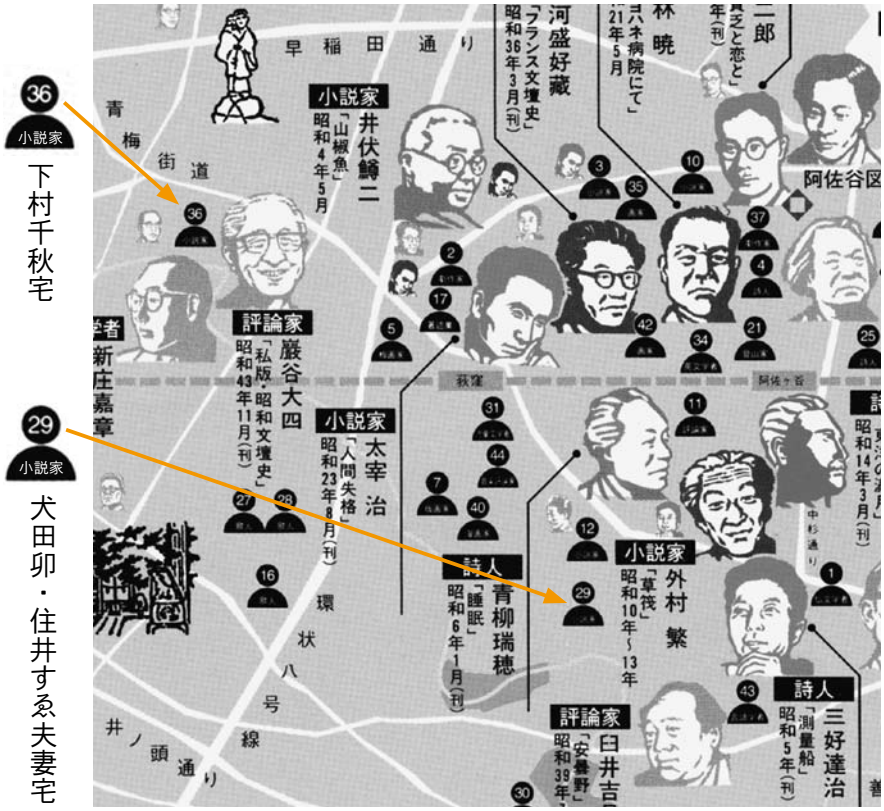
茨城県内では、県議会発行「大地に緑の塔を（茨城県議会100年の歩み）」をはじめ諸記録を見てみると、それまでに銀行の合併が進み、土浦町本店の五十銀行と、水戸市本店の常磐銀行の二大銀行（両行は昭和10年に合併して常陽銀行になる）に収斂（しゅうれん）されていたため取り付けの騒ぎはほとんど起こらなかったようだ。

金融不安についで物価暴落、不況、それに昭和4年10月の米国ニューヨーク株式市場の大暴落によって世界的大恐慌となった。同年11月の発表によれば、日本の総労働人口の4・36％の失業者がちまたにあふれた。一方、同年9月に大学を卒業しても就職が困難だった世相を描いた高田稔・田中絹代出演の映画「大学は出たけれど」が松竹で封切られた。

翌5年の2月からは朝日新聞夕刊に、失業した浮浪者を描く「街の浮浪者」の連載が始められ、これが評判となり「ルンペン」が流行語になった。「街の浮浪者」の作者下村千秋は稲敷郡朝日村（現稲敷郡阿見町）本郷の出身だ。妻ちよは奥野村島田（現牛久市島田町）の八島家の出であった。下村は杉並町の犬田卯宅の近所に住み、両者は農民文学の仲間でもあった。

この年、生糸（きいと）の価格が暴落し、東北では冷害に襲われ、農村恐慌が一段と深まった。

茨城県は言うまでもなく農業県であった。茨城県における米・麦・食用農産物・果実・野菜・工芸農産物や畜産物の価格は昭和2年から6年にかけて約50％も暴落し、これらの生産価格が昭和元年の水準に戻るのは同11年のことであった。



「街の浮浪者」の作者下村千秋と交流のあった犬田卯・住井すゑ夫妻の居宅所在地。

―杉並区立阿佐ヶ谷図書館提供「阿佐ヶ谷文士村マップ」より